

チトワン国立公園からの問いかけ

—自然保護と奴隷解放に見る共通性—

平成 19 年入学

参加したフィールドスクール：ネパール・フィールドスクール

調査国：シエラレオネ共和国

首藤あずさ

キーワード：博愛主義 奴隷解放 自然保護 チトワン国立公園

自分の研究テーマについて

ダイヤモンドをめぐる紛争をきっかけに世界に注目された西アフリカのシエラレオネ共和国は、少年兵や政府の汚職など、「博愛主義」とはほど遠い側面ばかりが目立って知られている。その一方であまり知られていないのは、シエラレオネの首都フリータウンが 18 世紀前半 19 世紀後半にかけて「博愛主義」の名の下に大英帝国内で解放された奴隷たちの送り先であったということである。19 世紀前半、イギリスは、奴隷解放以外にも、動物虐待禁止運動や精神病患者の状況改善などの改革運動を行なうことによって、「博愛主義」の国としての性格を形成した。フリータウンは、世界に先駆けて奴隷解放を行なった「博愛主義の国・イギリス」を支える上で重要な役割を担っていたのである。

私は、イギリスが主張する「博愛主義」の下に施行された「奴隷解放」という過去の出来事が、シエラレオネの現在を生きる人々に、何をどう訴えかけ続けているか、すなわち、現代シエラレオネにおおきな影響を与え続けているイギリスによる奴隷解放という歴史の残した問題点を明らかにすることを目的に研究を続けている。

その歴史的背景を見ることをひとつの目的として提出した博士予備論文では、奴隷解放によって造られた「民族」クリオ(解放奴隷の子孫を指す)の孤立の根深さを見た。クリオはシエラレオネにおいて政治的・経済的に支配的な地位にあったが、20 世紀前半に衰退した。従来の研究では、この原因をイギリスによる人種差別や保護領エリートの台頭と結びつけてきた。私は、このほかにも、クリオ同士の対立関係から生まれる孤立がクリオの衰退と深くかかわっているのではないかという仮説をたて、この問いを明らかにするために（ネパール・フィールドスクールへの参加に先立って）、イギリスの大英図書館で 2 週間の資料収集を実施した。これにより、おもに 20 世紀前半に対立関係にあったふたりの著名なクリオ、ウォレス＝ジョンソンとバンコール・ブライトの様子を記載した当時の新聞記事や雑誌を収集することができた。今後、これらを検討することによって、クリオの孤立と衰退の関係を読み解き、「奴隷解放」という出来事と現代シエラレオネに関する考察を深めたい。

フィールドスクールから得られた知見について

自身の研究を発展させるうえで、今回のフィールドスクールで得られた知見のなかでももっとも興味深かったのは、チトワン国立公園をめぐる現状である。国立公園は、「自然保護」という「思想」のもとに作られており、こうした思想は奴隷解放と同一の流れをくんでいると考えられるからである。

チトワン国立公園が設立された1973年以前、その周辺に暮らす集落の人々は、主に漁業によって生計を立てていた。ところが、彼らが漁場として利用していた場所が国立公園に指定されて以後、突然「密漁(猟)者」とみなされ、生活は一変する。この「密漁(猟)」を取り締まるレンジャーは軍隊であり、これは世界の国立公園の中でもめずらしい例だと言える。王政時代から今なお強い権力を保持するこの軍隊と、地域住民との間のいざこざは絶えず、次々と問題が起きている。自然保護のために成立した国立公園が、ネパールの人々の生活にうまく溶け込めずにいるのである。

フィールドスクールにおいて、こうした国立公園の現状に対する解決策を議論する機会を得た。森林、野生動物、地域住民などの多角的な視点からさまざまな意見が提出されたことにより、より立体的に国立公園で起きている問題を理解することができた。そして、その解決策は決して一方向的なアプローチであるべきではないと考えさせられた。このような考えを持つことができたのは、フィールドスクールの大きな特徴である集団行動に与しており、それぞれ研究分野が違う者同士が、同時に同じものを見て、その場で意見交換することができるという機会があってこそであったと思われる。



写真 1. 国立公園周辺に住む「ボテ」の集落



写真 2. 国立公園を眺めるフィールドスクール参加者



写真 3. 国立公園内には象に乗って入る



写真 4. 国立公園の中は人工的な手入れが目立つ

フィールドスクールで学んだことがどのように研究テーマにいかせるか？

ネパールの国立公園の形成と、シエラレオネの首都フリータウンの形成を重ねて考察してみたい。国立公園の成立によって、地域住民の知らないところで突然何かが決まり、追い出され、生活が一変するが、「博愛」や「人道」という思想がそうした弊害を覆い隠している。一体、何のための、誰のための自然保護なのか。この疑問は、私が奴隷解放に対して持っている疑問、すなわち、奴隷解放は誰のためのものだったのかという疑問と深くつながっているように思われてならない。しかしながら、共通の根をもっているとはいえ、そこで起きる問題にはそれぞれの地域性が出ており、一枚岩的な問題理解では不十分であると、今回のフィールドスクール中に実感した。その点を意識しながら、現代シエラレオネから奴隷解放という歴史の意味を読み解いていきたい。